フランス文化探訪・覚え書き

小　玉　齊　夫

1 フランス・文化・探訪

＜文化＞はそれを生きている人々の生活に認められる＜行動様式＞（複数）である。文化は＜生きられるもの＞であり、必ずしも、趣味として鑑賞される対象ではない。ここから、①生活としての文化と②教養としての文化との区別がなされ得る。前者の体験は実際には容易ではないが、おそらく文化探訪という語意には、疑似的にではあれ、教養の摂取にとどまらず＜生きられている＞文化に接近すること、も含まれているように思われる。

この＜疑似的な体験＞が、学校教育に於ける授業・講義（あるいは実験）の範型（のひとつ）である。現実とか疑似とかいう語彙の抽象程度は多様であるが、授業・講義は、さまざまな現実を*あらかじめ*あるいは*後になってから*ともかくも疑似的に体験させ、＜生きられている文化＞の在り様の［表現・了解］を*あらかじめ*あるいは*後になってから*準備・確定することをめざしているからである。

とはいえ、疑似的体験としての文化探訪の授業がいわゆる国際化の風潮の中で捉えられる時、その講義は、①疑似性を弱める方向（偽りの体験ではなく探訪の実践へと向かう方向）を取るのか、あるいは、②疑似性を強める方向（非現実性に徹することで文化に関する抽象的論理化へと向かう方向）を取るのか、①、②のふたつを両端とする扇形の内部のどの辺に位置を占めるべきなのか、その選択が求められてくることになる。①は実現の可能性が少ない—だからこそ探訪の講義が求められていたのではないのか？—ために、やむを得ずあるいは必然的に、②に比重を置く傾向が、学問という名目でみずからを飾りつつ優勢を維持してきた。だが、実現の可能性が技術的あるいは物質的に「解決」さ

れるにつれて、「現実の探訪に備えるための講義」という実用性さえ求められているのが昨今の実情である。文化の大枠とその内部を埋める知識を予め提示し、現実の探訪の際にはその知識を検証・確認させる、というこれまでの授業の在り様は、その必要性は依然として否定し難いとしても、今日では他の異なった方向もめざされるべきではないのか。[自／他] の文化の背景あるいは基盤に関わる現実的・個人的な対応の準備もなしに、一般的な文化相互に渉る抽象化・論理化をめざしても、それほどの効果は期待できないのではないのか。

文化論講義で求められているのは、おそらく、個人の文化的体験の枠組みの [真実性／疑似性] を明らかにすることではない。授業・講義には不可欠とみなされてきたこの種の「真実か虚偽か、マルかバツか」の検証は、文化体験に関してはおそらく無用なのである。自身の文化に向かう時であろうと他者の文化に向かう時であろうと、個人の現実的な文化に関わる体験を [拡張・深化] させることが必要なのであり、それによって諸文化の在り様を言うならば相対化することが可能になり、それを通じて、諸文化の在り様を総体として把握することが可能なのである。

この事態を、私がこれまで規定し採用してきた語彙で（いささか衒学的に）表現するなら、授業出席者が、自身の文化的 [感覚・方向・意義] の内部で現実化してきた自分自身、つまりは [文化－内－存在] として規定されている自分自身の [表現－了解] 行動の事実性に対して、その [時間的・空間的] な延長上に、＜生きられたもの＞として在る他の文化に個人的に関わっていく過程としての疑似的体験を、どのように＜接ぎ木＞し得るか、が問われているのだということになる。

2 フランスという [時間・空間] —その1

そのような趣旨あるいは根拠に基づき、最初の授業（4月16日）に「あなたにとってフランスとは何ですか？」という設問が提示された。授業出席者がこれまで持っていた（あるいは、持たされていた）文化的 [感覚・方向・意義] の中にある＜フランス＞なるものをまずは把握しておきたかったからである。

以下はこれに対する口頭による諸回答を、私の基準でまとめたものである。

①人（フランス人）に関わるもの：

a）性格判断：　気高い
格好つけている
傲慢
美人・美男子

b）固有名詞：　ナポレオン
ジョルジュ・サンド
フランソワーズ・サガン

②民族的「作品」に関わるもの：

ファッション
ルーヴル美術館（印象派絵画）
芸術
エッフェル塔
ヨーロッパ連合

③地理：

プロヴァンス地方

④自分の意志：

夢
行ってみたい国

翌週（4月23日）にも前回の欠席者に対し同じ問いを提出したため、数の上では若干の重複があったが、結局のところ一項目につきほぼ一名という散らばった回答を得ることになった（回答総数：18）。

この回答内容を、「貧しい」、あるいは「ステレオタイプである」と慨嘆することは、おそらく当を得ていない。この種の即興的な反応を求める問いでは、簡潔な返答を強いられるため、ふだん思っていることのすべてが表現されると

は言い難く、再度尋ねられた時にはまったく別の言葉が返ってくることもあり得る。それに、一般論としての水準が貫ぬかれにくいから、問いかけの時点での社会情勢など、たまたま見聞きしたものがそのまま本質的なものであるかのように回答に反映され得る。作家名などはその典型であろうが、「夢」とか「行きたい国」も、連綿とつづいている（らしい）萩原朔太郎的憧憬の延長であるのか、『プロヴァンス物語』による一時的な流行によるものなのか、ここでは明確に定め難い。フランス人の「傲慢」は「核実験に関連して」という説明が回答者からあったが、それはそれで有り得る見方としても、一方では、西欧・東南アジアに於ける「傲慢な日本人」という論調とより長期的な視野で対比させる可能性が、「核実験」のためにかえって失われたと言うことも出来る。ともあれ、出された諸回答は、おそらく渋谷の街頭で設問がなされた時の回答と同様の傾向を示すものであろうことを、ひとまずは確認しておきたい。

私の分類のもうひとつの基準は、知識に関わるものと判断に関わるものとの区別である。内容の貧しさは知識の貧しさに基づいているのかもしれないが、しかし、「傲慢」というような判定は、知識に関わる回答と比べると、回答者の個人的な視点（もちろん、社会的通念の＜翻訳＞でもあり得る）や捉え方、意向、判断の相違をより明瞭に写し出していると言える。確かに、「印象派絵画」という回答にも、知識だけでなく価値に関わる判断が含まれていると言えなくはないから、弁別の基準はいささか曖昧ということになるが、この種の即興的な問いかけの場合、それほど背景を広げ心の奥底を「精神分析」をする必要もあるまい。いずれにせよ、「知識」を増やすことも必要であろうが、それだけでは＜文化＞の＜探訪＞にはなり難いのではないか、回答のなかに示されている「判断」に関わる「文化意識」が、おそらくは＜文化探訪＞授業のきっかけであり、判断に関わる諸回答の間の不一致・不整合こそが、個人の実際に有している文化意識の現実態として＜文化探訪＞講義の基準・起点となる素材ではないのか、というのが、私の考える＜文化探訪＞講義の［感覚・方向・意義］ということになる。

方法的にはしかしながらそのように規定できても、主として知識依存の方向

が採られ、判断に関わる意見は授業からの「脱線」あるいは雑談というかたちで個人的に提示されてきた講義の在り様は、判断の押し付けを避けたいという「賢明な」意図に基づいていたであろうが、実際にはむしろ、個々の「判断」を圧倒的に上回る数量の「知識」を叙述し展開しなければならない現実の反映であったと思われる。とすれば、上の、判断に関わる回答（①－a、④の6項目）が、知識に関わる回答（①－b、②、③の9項目）より甚だしく少ない訳ではなかった、という事実に対しては、知識量のさらなる増大を計るのは当然としても、判断への果敢な傾向がそれなりに認められることに満足すべきであって、授業出席者各自が個人的な視点・捉え方の相違を明確に提出するまでに到っていないことをこの時点で悲観する必要はないように思われる。

実はこの時はまだ出席者に伝えていなかったが、前期のみ担当する私の最終回の授業で、「あなたにとってフランスとは何か？」をもう一度聞く予定でいた。半年間の＜フランス＞＜文化探訪＞の後に、出席者それぞれが自身に固有の文化的価値判断に基づいたバラバラの＜フランス＞像を提出し得れば、これは私の授業にそれなりの意義があった、と私自身は勝手に自己「評価」できる訳であり、これに反して、皆が「これまでの授業」の在り様に忠実に与えられた同じ知識に基づく同じ＜フランス＞像を回答することになったとしたら、私の授業・講義はステレオタイプの単なる再生産に役立っただけ、と自己「点検」せざるを得ないことになるのである。

3 個人次元と類型化

石田英一郎『日本文化論』（ちくま文庫、1987年版）に、他書からの引用であるが現実の事件に基づいたかのようないささか大胆な指摘がある。細部は省略せざるを得ないが、「レストランで自分の過ちで皿をこわした時、日本人はみずから非を認め弁償をすることさえあるが、アラブ人などは絶対に謝らない」というものである。骨格のみの紹介では誤解を招き得るにしても、このような「比較文化」的（まことしやかな？）図式化あるいは断定の事例をどのように解釈すべきなのか？

文化現象に関わるほとんどすべての記述は、「珍奇な」ことどもを見聞きした個人の［記憶・記録］に基づいている。したがって厳密には、まず見聞きし観察しているこの個人の＜文化意識＞、記録を行っている時点でのこの個人の記述の在り様が検討されなければならない。玉虫左太夫『航米日録』（1860年1月末から9月末までのアメリカ旅行記）には、彼の儒教道徳意識から珍奇と判断されたことどもが記されているが、今日それらを見返して既に珍しいとも奇妙とも言えないものも多い。ということは現在の読み方としては、その珍奇さは玉虫左太夫個人の＜文化意識＞、あるいは彼がおのずから＜翻訳＞してしまっている彼の［環境・時代］の＜文化（的）意識＞の現われとして把握されなければならない、ということになる。玉虫の叙述をそのままに信じこんで、（玉虫が記述した）アメリカ社会という対象自体に（玉虫が記述した）「珍奇な」事象が現在でも貼り付いていると読解することは、当を得ていないということになる。

とすれば、これと同じ原則は、時代が違うとはいえ上の石田英一郎の指摘にも当てはまる。たとえ現代に於ける「権威者の記述」であっても、石田英一郎の指摘を「実際の在り様そのまま」と信じ込むことは必ずしも当を得ていないということになる。記述された対象の在り様を時代を超えた普遍的なものと見なす前に、石田英一郎個人の文化意識がまずは対象にされなければならない。「すべての（ということになってしまう）アラブ人は自分の非を認めない」と引用するに到った石田英一郎の事態の内部に、個人の文化的［感覚・方向・意義］が表現されていることを確認しなければならない。私は、と言えば、「レトリックなのだから」という「弁明」がどこまで通用するだろうか、ということも考える。そして、誤って皿を割っても謝らない人は、ふつう、どの文化に於いても「躾（育ち）の悪い人」と言われるのであり、したがって「誤って皿を割っても謝らない人」は、ふつう、どの文化に於いても存在する、と考えると思う。あるいは、アラブ人は、イギリス人やフランス人の経営するレストランでは謝らないかもしれないが、アラブ人のレストラン経営者には謝る（という視点はありそうだ）、などと思う…

要するに、これは「見てきたような」講義に於いても同様であるが、個人の旅行報告などはすべて、「そういう見方もあり得る」と読むべきであり、それらが「事実」そのままであるか否かについては、いわゆる＜括弧に入れる＞態度を取るべきではないか、というのがここでの私の主張である。石田英一郎の挑発的な指摘を引用したのは、したがって、それが「真実か虚偽か、マルかバツか」を決めるためではない。「文化の諸実例が比較の観点から提出される時、これらの例を、或る個人の他文化に対する個人的反応という次元に限定したほうがよい」という態度が我々にはまず要請されていることを確認するため、である。私はこれを＜個人次元への還元＞作業として、＜文化探訪＞の試みの最初の一歩と考えたい。自身のものではない他の文化の紹介は、新聞・映画・テレヴィ等のマス・メデイアによる場合であっても、基本的にはフィリップ・フォン・シーボルト個人による紹介作業（『日本』）の在り様と変わっていない、と思われるからである（紹介の視点の相違、紹介の水準の相違というようなことは、また別の問題である）。

＜個人次元への還元＞がなされたとして、しかし実際に現出してくるのは、その時点までに［形成してきた・形成させられてきた］各個人の＜文化意識＞の内容とその働きであり、結局はその個人が生活している社会に一般的に流布している、他の文化に対するさまざまな判断の＜翻訳＞の一例（あるいは複数例）である。［文化－内－存在］として在る個人が、自己にだけ固有な独自の判断を、自身の文化の内でみずから産出することは、むしろ稀と言うべきであって、実際には逆に、或る［環境・時代］のなかの＜社会＞が個人の判断を借りて自身を表現している、と捉えることさえ出来る。社会が有する文化的意識の大勢は、したがって、いわば統計的な数値判断によって推し量られざるを得ない、ということになる。このようないわば統計的な判断を、以下、＜(確率的) 傾向性の認定＞と呼ぶことにしたい。

この＜(確率的) 傾向性の認定＞の在り様は、通常、次のふたつに分けられる。①文化の類型や国民性への言及の際などにそれと自覚されずに援用される場合。②或る複数の抽出例の中で「多数」を占める傾向性をグループ全体の傾向

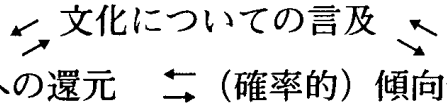
と認定する場合。言いかえるならば、①は個人の表現の根拠として、②は諸個人のさまざまな了解の在り様を全体として集約する際の表現の根拠として、おのずから＜(確率的) 傾向性の認定＞に基づく表現がなされる場合であり、いずれも、その正誤については深く問い詰めることをしないで済ます（済ませられる）場合、ということになる。

実際には、国民投票などをする訳ではないから、「確率的に多数である」と判定している①や②の「根拠」を正確に提示しようとしても、多くの場合、不明確・不明瞭な曖昧さに突き当たってしまうだけである。にもかかわらず、この種の＜(確率的) 傾向性の認定＞は、日常的な＜文化についての言及＞のなかで、まるで数学的真理であるかのように既に十分な市民権を確保してしまっており、それなりの便宜性と説得力を有した言語表現をもたらしてきている。だからこそ、「アメリカ人はこれこれである」という全体に関わる言及に対して、「おまえはあらゆるアメリカ人に当たって確かめてみたのか？」などと言い返すことじたい既に無意味に思われ、せいぜい、自分はそれと反対のあるいはそれには妥当しない経験をしたことがある、といったたぐいの、＜個人次元への還元＞に基づく反論を行うだけになる。

このような、「アメリカ人はこれこれである」といった一般的あるいは全体に関わる＜文化についての言及＞を、あたかも数学的真理であるかのように個人が安易になし得るのは、その判断の根底に、「世論調査では1000例程度の抽出でも国民全体の動向がおのずから反映される」という、確率的な有効性への判断が潜んでいるからに違いない。少なくとも、＜文化についての言及＞は、「自身が体験した少数の実例だけでも一般化をなし得る領域に在る」というような、言うならば「不遜な」判断が、各個人によって当然（改めて問いただされると少しも当然ではないことに気づくのだが）とされている領域の言語表現のようである。このような＜(確率的) 傾向性の認定＞が、さまざまな場合に到る所でなされているため、この判断を恣意的なものとして拒否すると＜文化についての言及＞じたいが成立しなくなるほどである。

＜文化についての言及＞は判断自体が「真実か虚偽か、マルかバツか」を問

う必要はない特別な領域であることを、事実に強いられるかたちで我々は認めなければならない。<文化についての言及>のこのような根拠の不確実さは、統一的な基準をもたらし得ないがゆえに、「諸文化相互の比較に際しては多様な要素を考慮しなければならない」ことをあらかじめの前提とするし、同一の文化であっても「時代ごとの特質や推移は容易には捉え難い」というあらかじめの配慮が必要になる。1874年、西周は言語改良に関連して「襲蹈ニ長シ模倣ニ巧ニシテ自ラ機軸ヲ出スニ短ナリ」という「国民ノ性質」に言及したが、常識的にはこれに異論は唱え難くとも、それではどのような基準・素材に基づき中国あるいは朝鮮との「国民ノ性質」を比較し得るのか、平安・鎌倉各時代の「国民（？）ノ性質」と明治期のそれとをどのように比較できるのか、という方法上の問題は依然として残されていると言わざるを得ない。



<個人次元への還元>に基づいてなされる<文化についての言及>は、そのままでは個人的な体験それじたいにとどまり、或る文化全体の動向を描出しているとは言い難い。しかし一方、<(確率的) 傾向性の認定>に基づいてなされた<文化についての言及>は、全体を覆おうとする意図のために抽象的であることは避けられず、個人の次元からの反論をつねに対極に措いたまま、という不確実性にさらされている。したがって、<文化についての言及>を総体的に企てようとすれば、<個人次元への還元>と<(確率的) 傾向性の認定>というふたつの契機に、空間的にも時間的にもともに依拠せざるを得ない。視点を変えて言うなら、①<個人次元への還元>と<(確率的) 傾向性の認定>は、<文化についての言及>が必ず蒙らざるを得ないふたつの<拘束>を構成しており、②それらは（いわゆる「二律背反」とは異なるが)、ヘーゲル的な現実を構成する光りと闇のように、現実的に対立するふたつの契機として存在し行動しているのである。<個人次元への還元>と<(確率的) 傾向性の認定>とが、相互に

対立しあいながらも補完しあっているという実情を自覚的に対象化することが、＜文化についての言及＞に関わる＜文化意識＞の発現する出発点である。

4 個人の＜文化意識＞と社会の＜文化的意識＞（4 月 23 日）

以下は、私なりの定義の羅列である（内容的には既に発表済みのものもある）が、いちおう再録しておく。

○＜文化意識＞の現われ：次の①と②との「複合」として在る。

①他の文化に対した時、自身がよって立つ根拠として対象化され意識される自身の文化がある。この時の意識は、自身の文化への＜帰属意識＞の現われである。

②他の文化に対した時、それに否定的に向かっていく意識の根拠としての自身の文化がある。この時の意識は、自身の文化に基づく、他の文化への＜否定意識＞の現われである。

①の時、文化は、その文化内の構成員に対して、日常的には潜在的なままであるが時には明確に噴出してくるような、対外的な＜共通性＞の基準として機能する。

②の時、文化は、積極的な［対比・対立］の根拠として機能する。

○具体例としての高村光太郎（授業に於いて、いささかなりとも紹介され得た）：モダニズム、＜フランス＞への傾斜、＜日本的なもの＞の「否定」（“根付の国”、“カフェより”）　→帰国後のデカダンス　→大戦、伝統に包まれた自己の自覚（『典型』）　→民族的「家族」の崩壊　→戦中の自己ならびに戦後社会への批判（『暗愚小伝』）

○個人の＜文化意識＞は社会の＜文化的意識＞を＜翻訳＞したものと考える（＜翻訳＞については別稿による）。

社会のこの＜文化的意識＞は、当然、時代に応じて異なった在り様を示している。授業の中で我々がフランス製のヴィデオ教材を通して見るのは、「フ

ランスという社会が現在ー厳密に言えば制作された1980年代ーのフランスについて持っている<文化的意識>のひとつの表現」ということになる。

○社会の<文化的意識>の<翻訳>としての個人の<文化意識>の例：

「イギリス人は歩きながら考える、フランス人は考えた後で走り出す、スペイン人は走ってしまった後で考える」(マダリアーガ『情熱の構造』)

「衣服の着方、歩き方、お化粧の仕方、帽子のスタイル、なににせよ受け入れられている標準に自分が順応していないのではないかとアメリカ人は心配する。街の中で誰かが自分を注意して見ていると考えただけで身震いがする。フランス人は全然違う。フランス人にとって他人から区別された完全な個人であることは大きな喜びなのだ」(ハンフリー・カーペンター『失われた世代ーパリの日々』

「(パリでは) ニューヨークやロンドンでのような退屈な画一化の生命を欠いた圧迫を感じないですむのだ」(同上。強調は引用者。1920年代のアメリカ人の、フランスあるいはパリに対する文化的意識の表現例)

5フランスという［時間・空間］ーその2

授業は、①ヴィデオによるフランスの都市・文化の紹介　②その都市あるいは地方に関わりのある（ありそうな）映画を見る　③それぞれに関し、都市紹介の場合は内容要約、映画の場合は内容についての個人的な見解を、各自に課題として提出させる、という体裁によって進めていった。具体的には、ケルト・ゲルマン文化とラテン文化との混融という観点も入れて、①の都市は、南のマルセイユ（5月14日)、ドイツ国境のストラスブール（6月11日)、ブルターニュのカンペール（6月25日)、首都パリ（7月9日）を選び、それらの前後に、いわば概説として、フランスの地勢・歴史的推移の紹介（5月7日）と、フランス文学・思想紹介（7月16日）を試みたが、このふたつの授業は、時間の不足もあって深みを欠き、表面的なフランス語の名辞の羅列に終始したことは残念ながら認めざるを得ず、授業出席者にも不評であった。この種の概説的紹介を出席者の知的興味をかきたてつつ行うことの困難さを改めて知らされ、

これは出席者の関心と絡み合った授業の進め方が出来たかどうかという問題でもあるが、いずれにせよ、今想い起こしてみると、＜文化探訪＞はやはりヴィデオ等の視聴覚教材に拠らざるを得ないという感は深い。

マルセイユ等の都市紹介のヴィデオ音声は、対比してみると、共通の原資料があったのかもしれないが、どうやらミシュランの*Guide Vert*が典拠であるらしい。だが、今回の授業のようにフランス語に触れたこともない出席者が殆どの場合、ヴィデオのフランス語の説明じたいもかなり聞き取り難いものであったが、内容は日本語による説明によって或る程度まで補い得たとしても（実際には、ヴィデオを停止させてからいちいち説明に移るのは、全体の流れに支障を来すだけでなく、何やら繁雑なコマギレ作業をしている思いに駆られ、時間にも追われて、説明者の意欲が萎えてくる場合が多かった）、若干の単語を「聞き取れた！」という喜びさえ味わい得なかったのではないか、といくぶん残念にも思われる。

この種の反省については今後の改良を待つほかないが、ここでは、出席者の映画に対する反応の例をとって、個々の「文化的な受け止め方」のいくつかを紹介したい。選ばれた映画は、地方色との関連をもたせた上で、いささかコジツケ気味ではあるが「共和国の標語」（＜自由＞・＜平等＞・＜友愛＞）のひとつの例としての解釈を、はっきり言えば強要した。具体的には、『マルセルの夏』（5月21日、原題：*La Gloire de mon père*）に於けるマルセイユ近辺での1910年頃の＜家族＞の生活を＜友愛＞の観点から、『ジュールとジム』（6月18日、原題：*Jules et Jim*、『突然炎の如く』という日本語題名は何なのだろう？）は、ストラスブール紹介の後に20世紀前半のドイツとフランスとの文化的交流の一例として、しかし映画としてはむしろ＜恋愛＞という男女の交流の根拠に在るべき＜自由＞の観点から、そしてパリを紹介する前に、憧れを持ちつつパリに接近し得ない人々を描いた『パリ空港の人々』（7月2日、原題：*Tombés du ciel*）に於ける、身分証明書によって保証されている我々の＜権利＞の在り様を＜平等＞の観点から、それぞれ、生活のなかの＜幸福＞との関連で見通すことを要求した。

以下、いずれも即興的ではあるが率直な感想が呈されていて、ここでも、知識を偏重しない個人的な判断を重視する方向での読み取りが期待されたのであるが、それぞれの記述の、全体からは切断されているが、カナメと見なされる部分を羅列してみる。掲載の順序は、個々の表現の＜対立＞を見やすくする配慮はしたが、それ以上に特別の意味はない。都合によって原文に若干の修正を施した場合がある。

①『マルセルの夏』：＜友愛＞の観点から見た＜幸福＞

「ローマカトリックの厳しい教えがどれほど国民に浸透しているか、を知って驚いた」（服部行人）　「宗教色の濃い中でも何か楽しみを見つけて生活している。常に幸福を願うことによって、みずから幸福に導くような積極的な行動をとっている」（伊賀敷美代）　「家庭は上品で貴族的なところが表われていた。子が父親の負け姿を見たくないという所に、フランス人のプライドの高さが象徴されていたように思われる」（本田隆太郎）　「マルセルの生活は幸福そのもの。過去にあのような生活をしていたという思い出がある、そのことじたいが幸福だと思う」（彦坂壮二郎）　「マルセルは裕福な家に生まれ、豊かな暮らしのなかで、単なる物的幸福だけでなく、優しい母親や、いろいろな事を教えてくれる父親に囲まれて育てられ、精神的にも幸福なのだと思う」（大森誠）　「家族と過ごす時間がいちばんの幸福である」（久保田俊輔）「自然と共存していく生活が、時間が流れていくように過ぎていく日々、が私の考える幸せである。自然、欲望に逆らうことのない日々」（益子華衣）「少年の幸福：①自然と戯れること　②友達ができたこと　③父子が仲むつまじく生活できたこと」（鷲見陽子）　「周りに自然があり、自由に動き回れること、生きていることを実感し、楽しい思い出をたくさん作ること」（伊藤達哉）　「主人公たちの生活環境は天国のように見えた。“桃源郷”の話を思い出した」（王　諍）

②『ジュールとジム』：＜自由＞の観点から見た＜幸福＞

「映画の中での友情や恋愛は、自分には理解できなかった」（本田）　「映画の主人公たちの生活は想像できず、どんな幸福を追及しているのかもぜんぜん

理解できない」（王　諍）　「背景が解りづらい。あそこまで恋愛・友情の在り方について深刻に考えるのはどうかと思う」（彦坂）　「自由ということが、何よりも幸福に値する」（久保田）　「ジムは、自分から見ると、とても不思議な存在である。最後に女性と自殺する（殺された？）が、彼にとっては最高に幸福な死に方だったのかもしれない」（野原）　「ジュールとジムとの友情は素晴しいものだし、カトリーヌも友達としてだったら幸せな関係でいられたかもしれない」（大森）　「この三人の幸福は、ただ一緒にいるだけで成立していたのではないか」（福地春雄）　「長く続く幸せはない。幸せに向かって生活している日々が幸せなのであり、幸せは、本人は気付かないものではないのか。男は女の行動、女は男の行動によって幸せになれるかどうか左右されている様に見えた」（菅野雅彦）　「女性としての幸福は、愛する人の側にいることだと思う。彼女の幸せなところは、自由をもっていたということ、自由の中で自分の本当に愛する人を探し続けることができたことである。」（益子）「女性の主人公の幸福について：①自由で縛られない生活に幸せを感じていた。②自分の美しさ、魅力を再確認し、愛されているという実感を持つことに幸せを感じた。③恋のかけひきをすることに幸せを感じた。」（鷲見）　「男の人は、結婚することが女の幸せだと思っているようでした」（伊賀敷）　「幸福＝戦争のないこと。結婚ということが一つの幸福だとカトリーヌは考えていると思う」（佐々木智宏）　「一瞬の静止画になる２カットが印象に残る」（服部）

③『パリ空港の人々』：＜平等＞の観点から見た＜幸福＞

「平等は互いに存在そのものを認めあうものだと思う。そこに、法や習慣が（介在してくると）これは崩れる。帰属するものがないというのは自由なように思えるが、映画の中では寂しそうであった。」（彦坂）　「無国籍状態になった時に、精神的な自由になり、そしてまわりの人達と平等になった。だれもが自分の言葉をしゃべり、それを理解しあっていることにそれが表れている」（益子）　「国家という大きな組織において、平等とは権利を持った者を同じ立場として扱う。この映画では、権利とは旅券である、紙切れ一枚である。この一枚があるかないかで、天と地の扱い（の違いがある）。通過客として集ま

っていた人達の中では、権利は人権つまり“人間である”という誰もが持っているものだけで、お互い、平等として扱っている。」(本田)　「人が一番不平等な状態にあるのは、生まれる土地や両親を選べないことではないか。夢があっても、生まれた土地によって夢がかないにくいという少年は、現実に世界中にいるはずである。このような現実の改善がなければ誰もが幸福になれる時代はやってこないだろう」(菅野)　「常識的に考えれば、国籍や身分を証明する物がなければ平等は守られないが、精神、意識的な面から考えれば、当人や周囲が互いに平等に接すれば、平等は実現できるのではないか、と思う」(鷲見)　「現代社会では、自分の身分を証明する公的な証明書がなければならない。パリの空港でも、証明書がないために、人権を守ってくれない。自由・平等・博愛を唱えるフランスでも、本当の自由・平等・博愛がない。」(王　涛)「何らかのミスによって間違った情報が送られたり、情報が消えたりして、自分が存在しなくなってしまうこわさがあった。おじさんは白人で子供は黒人だが、人種など気にせずに養子にするということが、フランスの平等と博愛の精神かなと思い、とてもすばらしいことだと思った」(野原)　「法的に人間として認められないことは耐え難いことのように感じられた。自由区という場所ではせめて人間扱いしてくれるという台詞がとても印象的」(伊賀敷)　「人間は耳に番号を付けられたうさぎと同じ、管理されている。その耳に付けられた番号とはパスポートだ」(王　諍)

④他に、一般論としての「幸福」観も書き出されていた。

「幸福とは、その度ごと、おかれた状態によって常に変わっていくものだ」(福地)　「本当の幸福とは物質的な充実でもなく、希望がかなうことでもなく、今自分のおかれた状態をありのままに肯定し、その中で、心の安定と体の健康を保つことである」(野原)　「一瞬の気持ち良さのために生きている。生きている間に、一瞬だけの気持ち良さに満足しようとしている。そのために、人々が全ての精力を搾り出している、その気持ちの良さを実現したとき、人々はそれを幸せと呼んでいると思う」(王　諍)

これらの即興的な反応に対し、知識にのみ基づく批評は無用と思われる。なるほど、①のマルセルの家庭は「貴族的」と言えるものではないであろうし、②のジュールとジムとカトリーヌとの間の「文化的な葛藤」も理解され難かったであったろうし、③の中の「死滅した」はずの言語を喋り続ける男の特異性が十二分に感得されたとも思いにくい。だが、それらすべては無視し、むしろ個々の感想の内部に個人的な＜文化探訪＞の［感覚・方向・意義］を窺い、それらの自覚的な発現を促すことが、おそらく授業担当者としてのなすべき作業だと思われる。本稿の記述の目的もそこにある。

6フランスという［時間・空間］ーその3：あなたにとってフランスとは？

授業を終えた段階で、前述のように「あなたにとってフランスとは何か？」という質問を再度提出してみた。だが、記述による回答を求めたこと、それに、回答者自身の慣れ、あるいは「こういう回答が期待されているのではないか」という「読み」もあって、知識に片寄っているか判断に向かっているかの吟味や、4月の授業開始時との比較などは、残念ながら厳密には無理と思われる結果になった。とはいえ、回答者たちのそれぞれの「作為」意識を濾過した、それなりの＜フランス＞像が描かれてはいるようなので、授業の「成果」の一面として、以下、私の基準による分類でそれらの若干を紹介しておきたい。（残念ながら本稿締切時まで全員が提出してはいない。）

①フランス人（の国民性）に関する判断：

シビアでいて、かつ情熱的、理想主義的（彦坂）

自己の意志を貫くのがフランス人の在り方（角張吉久）

②国あるいは文化に関する判断：

他国が入りにくい文化を持った国（鷲見）

イメージだけでなく、社会問題・経済など現実的な問題から見て行くことが必要であることを実感した（野原）

文化と共存している国。その文化の中にも戦争と深く関わりのあるものが多い。それでも、フランスのイメージと聞かれたら、やはり「芸術の街」とか「ファッションの最先端」(大森)
幸福を願う国(伊賀敷)

③自分の意志:
小さいころから憧れていた国、特に郊外の田舎が好き(益子)
歴史的背景に興味を持つようになった。以前よりもっと行って見たい国(菅野)

前に挙げた二つの基準、①知識よりは判断を重視しているか、②各自の関心が固有の(てんでばらばらの)方向性を表現しているか、に照らしてこれらを見直すと、私の授業もそれなりの成果を得たか、と思われないでもない。ただし、授業出席者あるいは課題提出者が過剰に私の意図に「迎合」しなかったのであれば、ではあるが…

7 日本という[時間・空間]

講義終了時の課題として提出を求めたのは、「フランス文化あるいは文化そのものに関わる作品等を読んでの論文作成」(*)であったが、いささか「官製」の匂いのするフランス都市紹介のヴィデオに食傷したこともあって、「日本文化を紹介するヴィデオの脚本を書く」という課題もあわせて出しておき、いずれかを選択させることにした。前者の中にも大森誠の「ゴーギャンについて」や王涛の「第二帝政のフランス文化」のような力作があったが、以下に紹介するのは、後者の課題に応えた野原直人(仏教学部禅学科一年)の作品である。内容に関しては、私の個人的考えでは反論すべき素材に溢れていると思われないでもないし、さらなる検討への期待はあり得ようが、しかしその試みの「独自性」(参照文献等は不明であるが…)は評価されてよいと思われる。表記に関しては若干の変更を加えた。

「はじめに

これは日本文化の中のいくつかのイメージを取り上げ、それらを項目別に見ていき、日本文化を大まかに見ると、それらのイメージの組み合わせによって構成されていることを示すヴィデオである。「観光」のヴィデオではない。

項目：1山　2神　3風　4鳥　5花　6仏　7時　8月

項目1　山

日本は海に囲まれた山国であることを強調する。そして富士山や各地方の「不二の山」と呼ばれる名山を紹介する。次に、日本の各地のめぼしい山にはたいてい「山の神」がいることを出す。これは日本人の古来からの山岳信仰を示すものである。やがてこれは仏教思想と混ざり、仏教を受け入れる上で重要なことを説明する。

日本人の山についてのイメージが多様であったことを、山をめぐる言葉で示す。例：山の錦→紅葉、山の客→僧侶、山豆→合歓の木、事件の「山」や、出来事の「山場」など。他にも、山車→だし

次に文化として「山水画」や「和歌」を示し、その数なども示す。山を眺めることから、次第に風景を鑑賞することを説明する。

最後に山が仏教の「極楽浄土」と重なったことを説明する。例：阿弥陀来迎図など。

「山」を日本文化の根本とする。

項目2　神

日本語の「おとづれ」を説明する。日本では神の到来を「おとづれ」と呼ぶ。これは「音づれ」である。神は見えないので微かな気配を感じとる。この微妙な感覚を、日本文化の微かなものに対する根本とする。また、神は古来の山岳信仰から発展したものであると説明する。

項目3　風

日本人がどれだけ「風」に関心があったかを「風のつく言葉」で示す。例：風の名前：コチ（東風）、ハエ（南風）、ヤマセ（山背）など。風のつく言

葉：風景、風流、風味、風紀など。

日本に風のつく言葉がなぜ多いのか？、日本人が風に託したイメージとは？

→目や耳でとらえられない季節感を感じること←神の音づれに結びつける。

項目4　鳥

日本の求鳥伝説を紹介。例：ホムチワケ伝説。そして口のきけなかった者が喋り出すという奇妙な内容に注目する。これは鳥が神の使いであり、鳥のさえずりは神の言葉で、飛んで行く山は神の国であるとして、「山」「神」と関連づける。

項目5　花

貴族は花に生命力を感じていたが、武家文化が起こると、短命な花に自らを重ね、花は男性的なものとなる。武士で出家した西行をとりあげる。彼の行き方や詠んだ歌を紹介。彼の歌の内容から「無常」というコンセプトを明らかにする。これを日本人の花に対するイメージのひとつとする。

項目6　仏

仏教が日本人に与えた影響の大きさを示す。言葉・信仰・文化・思想など、あらゆる面で仏教的なものを示す。次に寺院などの古びた外観を示し、派手でありながらどこか簡素さがある、と説明する。

項目7　時

花を例にとり、その時間経過の「ウツロイ」を「無常」としてとらえることを説明する。

次に「間」をせつめいする。

空間的な間―区切られた空間

時間的な間―一定のかぎられた時間の広がり

日常会話から「間」のつく言葉を挙げる。例：「間に合う」、「間抜け」など。

項目8　月

日本人は月に対して、外国とは違い、悪いイメージはないことを説明し、1～7項を全て合わせたのが月に対するイメージであるという。そして月に関

するもの、絵・歌などを、数多く取り上げる。そしてその集大成が「月見」ではないかと言う。

最後に日本文化には必ずといっていいほど、これらの項目が含まれており、これらの項目の組み合わせで日本文化は成立していて、日本人の精神にもこれらの項目が含まれている、と説明して終わる。」

（＊）各提出者により取り扱われた課題：

伊賀敷美代「日本文化紹介」
伊藤達哉「『異邦人』『女の一生』を読んで」
大森　誠「ゴーギャンについて」
岡安由紀子「フランス文化探訪レポート」
角張吉久「『異邦人』『シジュホスの神話』」
久保田俊輔「『恐るべき子供たち』」
菅野雅彦「『女の一生』『悲しみよこんにちは』を読んで」
野原直人「日本文化紹介のヴィデオ」
服部行人「フランス映画について」
彦坂壮二郎「『異邦人』と『転落』を読んで」
本田隆太郎「『風車小屋だより』と『人間嫌い』を読んで」
益子華衣「日本文化の紹介」
鷲見陽子「『女の一生』『悲しみよこんにちは』を読んで」
王　涛「第二帝政のフランス文化―マネを通じて美という文化への考え方を見る」
王　諍「『愛人』について」

◎ 本稿は抜刷を授業出席者に配布する目的で書き記されている。